

# グローバル人材の育成を図るための教育プログラムの開発・実践

～高知南中高における英語教育プログラム～

高知県教育センター 学校支援部 研究開発・グローバル教育担当

## 1 研究目的

社会や経済の急速なグローバル化に伴い、高度な英語運用能力とともに、論理的思考力や課題解決能力、コミュニケーション能力等を備えた人材育成が必要とされている。そして、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（文部科学省、2013）」、「高知県英語教育推進のためのガイドライン（高知県教育委員会、2015）」においても、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことが求められているところである。そこで、「生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身に付けるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成する」ことを目的とし、平成 27 年度から 3 年間英語教育プログラムの開発・実践を行った。

## 2 研究体制及び研究方法

本研究は、平成 26 年度に高知県教育センターと研究協力校である高知県立高知南中学校・高等学校（以下、「高知南中高」という）が、中高一貫校の特色を生かした系統性のある指導を目指し作成した「6 年間のイメージ」、「6 年間のシラバス」を活用した英語教育プログラムの開発・実践である。平成 27 年度中学校 1 年生からスタートさせた。

「6 年間のイメージ」には、グローバル人材のイメージと、主に話すこと、書くことについて、「高校卒業時に英語を用いて～ができる」というゴールに向かって、高 3 から中 1 へと逆向きに設定した各学年の学習到達目標等を、そして、「6 年間のシラバス」には、その学習到達目標を達成するための各学年の学期ごとの学習内容、到達目標、パフォーマンステスト等を示している。この二つにより、中高英語科担当教員が全学年で付けたい力と学習内容を把握し、指導に生かすことができると考えた。

高知南中高では、グローバル教育校内委員会、英語教育推進チーム会を設置し、進捗状況を確認しながら研究を推進した。そして、高知南中高に常駐する教育センター指導主事とその他の教育センター指導主事が連携・協働し、指導・助言を行った。また、「高知南チーム」として取り組めるよう、教科会を実践内容やその結果を共有し次の方向性を確認する場として位置付け、PDCA サイクルを機能させた。研究成果を検証するため、全生徒を対象に「英語学習への意識・実態把握調査」（以下、「生徒意識調査」という）を平成 27 年度から年 2 回、英語科担当教員を対象に「英語教育プログラム意識調査」（以下、「教員意識調査」という）を平成 28 年度から年 1 回実施した。そして、高知県グローバル教育推進委員会（年 3 回開催）で進捗状況を報告し、グローバル教育推進委員からの助言を研究に生かした。

## 3 研究内容（3 年間の概要）

### 〔27 年度〕

研究初年度に当たり、高知南中高英語科では、学校のグローバル教育目標「貢献的行動力をもった国際人の育成」を受け、生徒の現状等を明らかにしたうえで、中学校は「主体的に考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒の育成」、高等学校は「自国の文化を理解し、国際的な視点で物事を考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒の育成」を研究主題とし、授業を通してその実現を目指すこととした。そこで、「6 年間のシラバス」を学習指導要領の指導事項と研究主題に関わる視点から見直し、効果的に言語活動を計画した。また授業で生徒が英語を使う機会を増やし、生徒が「英語を用いて～することができた」と実感できる授業づくりをすることを共通理解した。



を測る問題に教科書や授業で使用したワークシートと同じ英文を使い、記憶で解ける問題があったりしたが、文法事項の定着を図る問題や読むこと、書くこと的能力を測る問題でも、実際のコミュニケーションの場面を想定した中で活用させることを踏まえて作成するようになってきた。

話すこと、書くことの評価に関しては、パフォーマンス評価を行ってはいったが、評価の信頼性という点から改善が必要であったので、中学校1年生を対象とし、ルーブリックを活用した研究授業を行った。第1学年「話すこと（発表）」の「CAN-DO リスト」は、「身近な事柄について、簡単な語句や文を用いて、即興で簡単なスピーチをすることができる」であり、単元のゴール活動に「外国人に高知の名所の写真を見せながら口頭で紹介する」ことを設定した。単元の始めに、授業者が例として行った高知の名所のプレゼンテーションについて、生徒によい点と改善点を考えさせることを通して、ルーブリックのレベルを共有した。練習段階では、ルーブリックに基づき自己評価・相互評価をさせ、その評価を振り返り再度プレゼンテーションをさせた。授業者は、学級全体と個人にフィードバックをしたりして形成的评价を行った。事後協議では、「授業者が例を見せ、生徒と何がよいか、悪いかをやり取りをすることにより、生徒はゴール活動での姿を具体的にイメージすることができていた」、「評価のポイントを黒板に掲示すれば、それを意識して練習することができたのではないか」等の意見が出され、「目標と評価規準を明確にしてから指導する」、「生徒が見通しをもてるよう工夫をする」ことを、全員で取り組んでいくこととした。

「教員意識調査」（2月）では、「バックワードデザインで授業を計画する」こと、「本時のゴールを達成させるための言語活動を設定する」ことは全員が意識していると答えたが、『CAN-DO リスト』と関連を図った指導、「評価規準に基づいた評価」ができていないと答えた教員の割合は、それぞれ53.3%、60.0%であった。このことから、各単元や1時間の授業で英語力の向上を目指して指導しているが、「CAN-DO リスト」から単元の目標を設定すること、目標の達成状況を把握するための具体的な評価計画に課題があることが分かった。また、「生徒に変容があった」と感じている教員の割合は、33.3%であった。高知県グローバル教育推進委員から頂いた「『CAN-DO リスト』の達成に向け、どの生徒もできるという目標と達成時期を決め、実践し見取る、次の目標設定をするというサイクルで、1つ1つの目標を達成していく」、「単元の終わりに生徒が話したり書いたりできるようになる英文を書き、具体的にイメージする」という助言を次年度につなぐこととした。

## 〔29年度〕

3年目の授業改善の視点は、前年度と同様に設定した。そして、年度当初に、指導計画の段階で、単元で身に付けさせたい力を具体的な英文に書き表すことを共通理解した。また、「CAN-DO リスト」の記述文が単元の学習活動をイメージできるものになっていれば、生徒はそれを読んで、「この単元では、英語を用いて～することができるようになった」、「～することはまだ十分でない」と自らを振り返ることができるということを教科内研修で学び、「CAN-DO リスト」を見直した。そして、それまでは「6年間のシラバス」に「CAN-DO リスト」との関連を示していたが、年間指導計画に「CAN-DO リスト」の関連表を入れることで、「6年間のシラバス」の趣旨を生かすようにした。

また、教科会で、「英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）」（文部科学省）のペーパーテスト及びパフォーマンステストを用いて、今求められている英語力を理解し、各学年段階でどんな力を身に付けさせたいかを話し合った。その上で、文部科学省や高知県教育委員会の指導事例を基に、各学年担当教員でルーブリックを作成し、教科会に持ち寄って、意見交換をした。他学年からの質問や意見を通じて、単元の目標とルーブリックの関連や各技能の目標の系統性等に関する

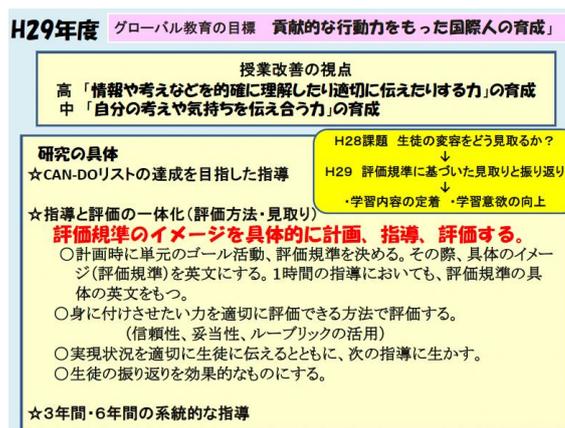


図2 平成29年度研究内容

協議をした。単元の目標・評価規準が漠然としているため、A基準・B基準をイメージした具体の英文とルーブリックの記述文の整合性が十分でなく、記述文を直したり、英文を書き直したりしたが、そのような作業を通して、目標・評価規準、学習活動が明確になり、授業をイメージしやすくなった。高知南高校には、他中学校から入学してくる生徒が多いので、全生徒が「CAN-DO リスト」を達成できるよう、指導内容の系統性、質的・量的な深まりを全員で考えていくことが、今後求められる。

#### 4 本研究の成果と課題

3年間の研究について、生徒意識調査と教員意識調査から報告する。表2、表3は、平成29年度中学校3年生及び高校3年生の第2回調査（平成29年12月）を、第1学年時第1回調査（平成27年8月）と比較したものである。

表2 「生徒意識調査（中学生）」

	中学校1年時 (H27第1回)	中学校3年時 (H29第2回)	中学校3年 (H27第2回)
英語の授業では、課題に対して自分の考えを持っている	88.4	77.3(-11.1%)	62.4
英語の授業では、積極的に英語を使っている	80.4	75.5(-4.9%)	66.0
英語を学習している理由 (視野が広がるから)	69.9	78.9(+9.0%)	74.3
英語を学習している理由 (英語が必要な社会になるから)	83.6	82.6(+1.0%)	88.1
英語で自分の意見や感想を言うことが好き	27.0	31.8(+4.8%)	31.2
英語で自分の意見や感想を書くことが好き	36.9	40.9(+4.0%)	30.3
英語の授業を70%以上理解している	55.0	50.9(-4.1%)	52.3

表3 「生徒意識調査（高校生）」

	高校1年時 (H27第1回)	高校3年 (H29第2回)	高校3年 (H27第2回)
英語の授業では、課題に対して自分の考えを持っている	55.2	68.1(+12.9%)	64.0
英語の授業では、積極的に英語を使っている	44.3	54.2(+9.9%)	47.0
英語を学習している理由 (視野が広がるから)	61.0	76.5(+15.5%)	71.3
英語を学習している理由 (英語が必要な社会になるから)	75.6	81.6(+6.0%)	77.4
英語で自分の意見や感想を言うことが好き	17.1	30.9(+13.1%)	24.1
英語で自分の意見や感想を書くことが好き	25.0	31.6(+6.6%)	26.7
英語の授業を70%以上理解している	31.1	45.8(+14.7%)	40.0

中学校3年生を1年時と比較すると、「課題に対して自分の考えを持ったり、積極的に英語を使ったりする」ことについて、数値は下がっているが、「自分の意見や感想を英語で伝えることが好き」になっている。同じく高校3年生を1年時と比較すると、すべての項目で伸びが見られる。授業の理解度も14.7%伸びており、一定の成果は見られる。研究1年目の3年生の数値と比較しても、ほとんどの項目で上回っている。教員意識調査（表4）では、「本時のゴールを達成させるための言語活動の設定」は、全員ができており、『CAN-DO リスト』と関連を図った単元指導、「生徒の変容」の項目がそれぞれ、+39.5%、+44.6%である。授業者が具体的にスモールステップで目標設定をしたことが、生徒の学習状況の見取りにつながったと言える。

表4 「教員意識調査」

項目	(% )	
	平成28年度 (12月)	平成29年度 (12月)
単元の指導や1時間の指導において、バックワードデザインで授業を計画している	100	92.8
CAN-DO リストを単元の指導に関連させる	53.3	92.8
本時のゴールを達成させるための言語活動を設定する	93.3	100
自分自身に変容があった	85.7	85.7
生徒に変容があった	33.3	76.9
これまでの研究は自分のプラスになった		100

本研究を通して、生徒の積極的にコミュニケーションを図る態度と英語運用能力の向上を目指し、英語を用いて「～することができる」という目標を設定し、英語を活用して定着を図る授業へと転換してきた。そこには、教科会を核として、一人一人の実践を、科で共有し、生徒の姿から次の実践を計画・実践するという教科マネジメントが確立されてきたことも大きな要因である。来年度以降も、学校目標の実現、課題解決に向け、計画的・組織的に実践すること、生徒の実態を通して協議を深めることにより、実践内容の質を上げながら、授業改善を行う。また、新学習指導要領実施に向け、「主体的・対話的で深い学び」、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」等が示すものを教員とともに理解を深め、高知南中高の授業につなげたい。